

―日比精錬所（岡山県玉野市）に強制連行された中国人を訪ねて―

「悲しみ」をいかに分有するか

上羽 修

それは、突然、感じとった瞬間だった。連行された人や遺族は、尊厳や名誉を回復していない！ 生還者の一人、楚方利さんの「恥ずかしい」と漏らした一言。それは、楚さんが家族の目前で両手を縛られ拉致されてから現在までつづく胸の奥の澱を、そして私を含めこれまで放置してきたものたちの責任を、私に気づかせた。

今年9月、日比精錬所へ連行された人たちのうち氏名・住所のわかった34名分の名簿を持って、河北省通県、現在の北京市通州区を訪ねた。やはり直接現地に行き、探してみるものだ。今もご健在の方が2名（楚方利さんⅡ写真上、龍徳慶さんⅡ写真下）、日比精錬所で死亡した人の遺族4名、生還後に死亡した人の遺族10名と会うことができ、さらに遺族と思われる5名分の消息がわかった。

なかには連行後まったく行方がわからず、今回私の訪問ではじめて日本へ連行されたことを知った遺族もあった。

働き手を突然奪われた家族は極貧に突き落とされていた。当時十二歳だった何慶仁さんは少年時代の惨めな記憶が蘇ってきたのか、声をあげて泣いた。

生還者の楚方利さん（八〇歳）によると、日本傀儡の中国人武装集団によって自宅で両手を縛られ拉致された。日比精錬所では食事が少なく、空腹での重労働が辛かったという。仲間が死亡したとき、日本のお坊さんが読経をあげ、それに中国人全員が参列したことをおぼえていた。この点は正善寺の前住職の妻の回想と一致する。

遺族の方々には、玉野市の観音院常光寺で供養がつづけられ、毎年慰霊祭を開催していることを知らせておいた。遺族のなかには、病気で動けなくなると生きてまま焼き殺された、と思っておられる人もおり、こうした誤解が私の説明で払拭でき、少しは安堵されたのではないかと思う。

とはいえ、生還者の楚さんや遺族の方々には、人間としての尊厳を汚され名誉を傷つけられたときの思いが今もつづいている。被連行者の尊厳と名誉を回復させるには、まず連行を計画した日本政府と使役した企業が謝罪し補償することである。その一方で、被連行者や遺族の悲しみを私たちが分有するにはどうすればいいのだろうか。